明治学院百五十年史編集委員会台湾調査報告

渡辺祐子

この3月、上旬には8日間アメリカに資料調査に行き、下旬には百五十年史編集委員として台湾に同じく調査に出かけた。海外をまたにかけて仕事をしているビジネスマンには当たり前の日常かもしれないが、同じ月に2回も成田空港のお世話になったのはこれが初めてだった（しかもアメリカ行きの飛行機は1時間半飛んだところでエンジントラブルのために成田に引き返し、出発が一日遅れるというおまけ付だった)。アメリカ調査は私個人の研究の材料を集めるため、一方の台湾行きは校務の一環であり、それぞれの目的は異なっているように見えるが、実は私の中では重なるところが小さくない。というのも、どちらも留学生研究に関わるものだからである。

アメリカに調査に行ったのは、1907年に神田で正式発足し日中戦争勃発直前まで続いた中華YMCAの資料をミネソタ大学にあるYMCA Archiveで収集するためであった。私はかねてからキリスト教を結び目とした日中関係の歴史を明らかにしたいと思っているのだが、実際調べ始めてみると、清末といわれる19世紀末から20世紀初頭、そして中華民国成立を経て日本の敗戦に至るまで、両国の間に想像以上に緊密な関係が（正負合わせて）あったにもかかわらず、断片的な記録が残されているだけで、系統だった研究がほとんどなされていないことがわかってきた。そのひとつの例が中華YMCAに関する研究である。中華YMCAには、周恩来はじめ中国現代史を彩る多くの中国人留学生が出入りし、抗日運動の拠点でもあったのだが、日本YMCAが神田からなくなってしまった今も水道橋で運営され続けている韓国YMCAとは全く対照的に、存在した

ことすらあまりよく知られていないようだ。中華 YMCA の活動実態を明らかにすることは、埋もれている歴史を掘り起こし、日中関係史に新たなページを加えるものとなるだろうし、近年盛んになってきている留学生研究にも資することができるだろうと考えている。

ちなみに 1907 年の中華 YMCA 設立記念式典で祝辞を述べたのが、当時明学総理のかたわら日本 YMCA の理事を務めていた井深梶之助である。中国人留学生の在学先は、ごく一部の「官立」学校を除けばなんと言っても早稲田、さらに成城、法政、明治などであり、明学は留学先の選択肢にはなかった。その状況を井深がどう考えていたのかははっきりしないが、立教が中国人学生に日本語教育を提供するための語学学校を設立していることと比較すると、明治学院の中国人留学生に対する関心は立教のようには積極的ではなかったことは確かだろう。

しかし明学は植民地朝鮮、台湾の学生は積極的に受け入れていた。3 月末の台湾訪問は、その歴史を明らかにすること、具体的には、かつて明治学院に多数の学生を送り出していた長老教中学(英国長老教会による設立。1939 年に長栄中学。現長栄高級中学) を訪問し同校付属の歴史資料館で資料収集をさせていただくこと、更にかつてこの中学から明治学院に入学した同窓生にお会いしインタビューすることを目的としていた。訪問団員 (?) は昨年北陸学院大学短期大学部に移られた辻直人先生、明治学院高校 (白金) の田丸修先生、岡村淑美先生、明治学院中学 (東村山) の佐藤飛文先生、そして私の 5 名である。中でも司書教諭として抜群の調査能力を有しておられる岡村先生と、大学で朝鮮史を専攻されていた佐藤先生の存在は大きく、私は皆さんのお働きにすっかりおんぶさせていただいた。

夕刻台北に到着し、そのまま新幹線で台南へ。翌日初夏の陽気の中、長栄高級中学 (日本の高等学校にあたる) へ向かう。1945 年の台湾光復後、台湾長老教会の教育機関として出発した長栄高級中学は、現在では生徒数 5000 人、教員 300 人を擁する大規模ミッションスクールで、幼稚園から大学までの関連校を傘下におく長栄学園の重要な一角を占めている。

正門を入ったところでうろうろしていた私たちを、何度かメールでやり取りをしていた英語教師の張女史が出迎えてくださった。まずは校長先生にご挨拶をし、久世学院長から預かった親書を手渡す。自己紹介のあと訪問の目的を告げたところ、「私たちの学校から明治学院に多数留学した学生がいたことは全く知らなかった。同志社に多数送り出していたことは把握しているのですがね。むしろ色々と教えていただきたい」とのおことばを頂いた。故阪口同志社大学教授が同志社大に留学していた台湾・朝鮮人学生について詳細に調査し、長栄高校とも連絡を取られていたのとは対照的に、明治学院はこれまで学院の留学生招聘事業に関する調査をほとんど行わず、戦後恐らく誰ひとり学院を代表して訪問することもなかったのであるから、こうした反応が返ってくるのは無理もないことだろう。その空白がいかに大きいものであったかは、直後の資料館での調査や、翌日台北での王金河氏との面談で再度痛感させられることになる。

続いて私たちは歴史資料館に案内され、資料を閲覧させていただいた。諸資料はほとんどガラスケースの中に陳列されている。必ずしも整然と整理されているわけではなく、どちらかと言えば片端から並べたという印象である。それでも学校日誌や後援会名簿のほか、学生を日本に送る際の推薦状があったり、卒業式式次第に明学入学予定の学生の名前が記されていたりと、興味深い資料を閲覧するこ

とができた。また最近まで台南神学院が保管していた台湾長老教会史関連の諸資料が多数ここに移されていた（神学院の資料室の老朽化が激しくなったための措置であるという）。さらに資料館の奥まった部屋をのぞいてみると、関東学院をはじめとする日本の中学、高等学校との交流記念の写真、手紙類が何点か展示されていた。関東学院とは姉妹校提携関係にあるそうで、関東学院が創立125周年を迎えた年には、同校が諸費用を全額負担し長栄高級中学のラグビー部を招待したとのことであった。

私たちが資料調査に最も期待していたのは、明学で学んだ長老教中学出身者の特定であったが、当時日本（内地）に留学した卒業生、ないし転学生の進学先が全て詳細に記録されているとは限らず、疑問点がすっきり解消されたとは必ずしも言えない。午後に『長栄高級中学百年史』を執筆した張厚生のお話をうかがうことができたが、同校の歴史を最もよく知る同氏によれば、明学に進学した学生を特定する決定的な資料は残っていないとのことであった。それでも大部な『百年史』を頂き、執筆者に直接インタビューできたことは実に大きな収穫であったと思う。

岡村先生と私はほぼ一日資料館で閲覧を続けていたが、男性陣は、途中で資料閲覧を切り上げ、明学で学んだ医師王金河氏の偉業を記念して設立された台湾烏脚病医療紀念館に向かった。烏脚病とは、手足の血流が滞留し壊疽に至り、最後には切断せざるを得なくなるという恐ろしい病気で、血の流れが滞るために手足がカラスのように黒くなることからこの呼び名がついたという。患者発生地域一帯の井戸水に含まれていた砒素がこの病気の原因であることを突き止めたのが、明学卒業生の陳拱北氏を中心とする研究グループである。また陳氏と同年に明治学院中学部を卒業した王金河氏（東京医専に進学、都立大久保病院での勤務を経て台湾に戻り、台南郊外の北門で無料診療所を開設）は、烏脚病患者の治療に献身的に勤める傍ら、政府に水道設備の整備を訴え、烏脚病撲滅に奔走した。2007年には陳水扁総統（当時）が、王氏の多大な貢献を称えて三等景星勲章を授けている。紀念館は北門診療所跡地に建設され、病棟や作業所跡もそのまま保存されていて、隣には台湾長老教会北門教会が建っているという。訪問から帰ってきた男性陣は、「ちょっと前に馬英九総統も訪問したそうですよ」と興奮気味に新鮮な感動をそのまま伝えてくれた。なお王金河氏は、長老高級中学の理事も務めておられる。

さて、私たちはその王金河氏ご本人に翌日台北でお会いすることができた。そもそも王氏という素晴らしい卒業生がいらっしゃることをご教示くださったのは、明学台湾同窓会会長を長年務めておられる蔡玉柱氏で、今回の王氏との面会もすべて蔡氏が取り計らってくださったものである。私たちの宿泊するホテルに蔡氏と一緒に現れた王氏は、94歳という年齢が信じられないほど若々しく、まずその矍鑠たるお姿に私たち一同感銘を受けた。子ども時代のこと、長老教中学の校長だった英国長老教会宣教師エドワード・バンドのこと、明治学院に入学したきっかけ、学院での生活、入信に至る経緯のすべてにわたってその記憶は鮮明で、付き添いでいらしていた王氏の娘さんも「現役を退いてから、ますます頭が冴え渡ってきているんですよ」と仰っていた。出版されたばかりで、来週書店に並ぶという王氏の自伝『側寫王金河—台湾烏足病患者之父的生命點滴』を私たち全員にプレゼントしてくださった王氏は、「長老教中学と明治学院は昔は兄弟だったのに、どうしてその関係が途切れてしまったのですか？そんなこ

とが許されてよい訳はありません。もう一度兄弟の関係を取り戻しましょうよ」と何度も何度も繰り返されていた。これは励ましのことばであると同時に、厳しいお叱りのことばでもある。台湾との歴史的関係を掘り起こす緻密な作業と、新たな関係を作り上げていくための熱心さに余りにも欠けていたことを、私たちは素直に認めなくてはならないだろう。同時にかつての「兄弟の関係」は、「主にある兄弟」としての関係には程遠かったことも忘れるわけにはいかない。王氏は兄弟関係の復活を切望しておられるけれども、昔の関係を焼き直すようであってはならないと思う。むしろ、私たちは全く新しい交わりを創出していくべきであろう。そのためには、日本の植民地支配に対する批判的な検証が不可欠であることは言うまでもない。

長栄高級中学訪問と王金河氏との面談が今回の台湾訪問の最も大きな目的だったが、これ以外にも、井深の直接の紹介で孫を明学に入学させた李春生ゆかりの教会を訪ねたり、歴代の牧師のうち4名が明学神学部出身という台湾基督長老教会済南教会（旧日本基督教会）で日曜礼拝を守り、礼拝後偶然にも済南教会史を執筆中の教会員（朱瑞墉氏）の説明を受けたりするなど、その収穫は予想以上であった。所期の目的に加えて、神様の不思議な導きを通して思いもよらない出会いが与えられたことを心から感謝したい。4 人の先生方にも大変お世話になった。この調査旅行を通して培った結束力を百五十年史の編纂に大いに生かしてゆきたいと思う。

※　この原稿執筆に当たって、百五十年史編集委員会（4 月 25 日）における佐藤飛文先生及び岡村淑美先生の報告を参考にさせていただいたことを付記いたします。

（わたなべ　ゆうこ　所員・教養教育センター准教授）